特67
327

鬼ハ外

明治十八年七月十五日發兌

發兌元　矯揉社

091600-000-3

特67-327

鬼ハ外

矯揉社

M18

DBO-0046

序

貧富弦かたのよしあしも腹のうち出弦
小槌ゑら望次第ゑ藏や家財を打出し得
とるも有家を田地も打出し失ふえあり
さまむ顔子れ貧樂を知らは盗跖が冨ゑ
もくるしむ事拔辨ふべし此ふみを見む
童弦直なる釣竿まがら曲針ゑかゝる人
もあらむ鬼い外ゑさゑ福徳いうちゑ積

特67
327

一助と元なれあしとアトの厨殿の口拍
子ゴ弦ヨ三番叟ゴ筆をとるも弦ならし

安永丑ね春　看覧

波太良加次
以奈可羅良
具於母止無
禮葉波也志
武陀以可根
不理目仁奈
留

滿津志幾母
土免流母羅
久母具流志
武母由目亭
古楚阿禮美
奈由目亭那
之

鬼の眼の明

鬼の眼の明

著者不詳

はまくは限合の外に出。夜い扉をたゝいて入子羅屋豆助として。

手代から丁稚をかけて家内ごらくらせども。自身片時休間なく。いれつくやうにかけまいり。もふける事にい。火の上をも渡りかねぬ氣性なれども。少しの不義もうけつけぬ。律義一筋一心不亂商賣の外に脇目ふらぎの商人ありけるが。或日法く

る儘に。日暮す事いまれにして。硯に向ふ外に筆をうめを。朝にい星をいたゞい

づく思ひけるゝ。我此年来たゞ手なくかせぐゆへ。追つく貧乏ゝおけれども。亦とらまへゝ福もなく。昔から宿賃だすがやつぱりいまに此借家。爰をいはでゝいつが立身する事やら。いつ安樂の身に成るやらと上を見れば慾おこり。余所を見ればうらやましく丸頭巾に紙子の羽織。来世またぞに此世から常極樂の人を伺るに。我等ゝば〳〵〳〵と来世またぞに此世から。ばたつき地獄に落はてゝ暮すね何の因果ぞ不方そと。帳箱に打もたれほつとり秋のうよ吹風におろはれて。とろ〳〵と眠りける

に。夢となくうつゝとなくもたれゝ帳箱形を變じ。人でもなく獣でなく赤くもなく黒くもなく色青白くやせがれて。髯ぼう〳〵と髪縮。身ゐがた〳〵とぞゞげだち破るかぶれの澁團扇をなゑたる腕にたかと持一トゆりゆつて立たるゐ。貧乏神とぞ知られける。さもひだるげな膏はりゐげ。時至れり時至れり。我かね〳〵汝まはけいり。此家をめつさやくさせんと思へども。汝求心をうち忘れ。家業一チ途に無油断はたらく故。中々われら付入事ゐ借おゐて寄付事もならざりし。待ばかんろの今日只

今汝大きに慾心生じ不足を起し。家業に倦の心を生ぜ盗人も手引あれば入易く。汝不足の心を生じて我を手引し招くゆへ。直ちに来りて貧を與ふ。速に受べきなり。これ元来我何とふるにあらぜ。汝がすきで求むれば なり古歌に「風とてさまて織なく思ふなよ身より出れば我子同前」是い暦々宿無納言雲之助人の御詠と見へたり。此名歌の通にて我もなんぢが身より生ぜる。貧之神として別にかたちのるでいおし。今迄い其方を助けし帳箱なりしが。早替して此御姿と舌をなやしわる身にて是も何故みんなおまへの不足より是から隨分あをちだし。家財不殘うらす迄いなみやたいていの私が苦勞。ろれを知らぜに貧州じやとて必さらひたまふなや。たとへ野の末山の奥いかなる所へひつそくのつても付隨ひ。水も皆にしやう手鍋もわりまし

よ。是みなさんしたか此團扇で一度あをげばよひ事を。せんの矢先雨や霰と火がふつて。家内殘らぜ燒むちやにさすい。わたしが大得もの。どんな苦勞もいたさせましよ。必さづかひなさんすなと惡縁契深草の少々ゴてもを足支を。知はて私をどうよく

に追出してばしくださんすおといふ聲耳に寒氣立豆助は夢かうつゝか起上り。大音あげて目をいからせ。惡奴のふれまひかな此年來夜を日にはいで拵しに。左までの銀の出來ざるは皆々己がなす所業よ。弱身を見込て形をあらはしたるは。汝が運の盡始と。十呂盤とつて投つくるべば貧州は團扇を持て受流せば。投たる十呂盤忽形を變じ貧乏神とぞなつゝりける。豆助大に腹をたて火入を取て投つくれば。是も變じて貧乏神豆助今は呆果。四邊をみれば帳も硯も筆墨も茶椀も釜も鍋杓子。家内の

諸道具何もかも貧乏神とぞ化したりける。豆助今はせん肩はまりはて。櫃でほゝらん物もなく。逃んとすれど足立ぜ。かなわん時の神祈まして況や。今日迄。信を込たる神棚の。あびす樣に兩手を合せ禮拜し。扶助玉へやゑびす樣。貧乏神を追出玉へや拂玉へと。心を凝し念をれば。信あれば德ある神の宮の扉。ぢぜんと開く音高く顯出させ玉ふ經子尊。豆助。嬉く頭を上て拜すれば。右の御手の釣竿と見へしは變じて。澁團扇。烏帽子と見へしは破れ頭巾。鯛と見へしは。とりやゝ。やく鯛。やつばりこびはも貧乏

神と。逃んとすれば跡より追ふ。踏止まればくるり
と取巻。お家の團扇であをぐにぞ。こけんとすれど
四方よりあをぐが故にこけられもせぬ。吹上られ
つ吹おとされ。水責火責のくるしみより吹れ責こ
うせつなけれ。豆助は透間を見合せ。ちいさき体を
どつさりすわり。行儀を正し膝をあげ。貧先生にも
の申さん。暫責を赦させ玉へと。懸慈なるよ。貧州も。
少は國をゆるめけり。豆助は天を仰で惑へるかな
〳〵。悔てかへらぜ。百病の其中に分て苦き貧の責
に逢事も。我身より出す我過。げに責らるゝも無理

ならぜ。難有御靜謐の御代に生来て。まだ其上に樂
を求。不足心を存ぜしは。愚痴とや言ん身の程を知
らぬと言も猶餘あり。或青表紙讀に聞る事あり。君
子は素二其位一行と云事を能合点をすれば。心常に樂
なりと言れたり。又こちの御寺様の仰には。何るべ
きやうの六字を守れば。三世とも安樂なりと。然に
我息災にて身を働き。借金せぜに暮せしは此上も
なき福なるに。我愚痴心人其位に素するとやらを
知らぜ。又我身の程の有べきやうを知らす。不足心
を起して。人を羨み天命に背て罪をうけ。責に逢て

我と少く過を知る。過を知は道に近し。道に近ね人の人たるゆるべきやう。此理の少にても解しね。何人以て我幸煩悩かへつて則ほだい。責極まつて安楽の人たる道の端を發明し。天命を悟しは福とや言ん徳とや言ん。いま貧先生の呵責ころ師匠弟子を打。惡にあらぞの深切と思へば。怨は恩となり「憂支のまだ此上に積れかせ捨し心の誠おやみん」と。人死する時いふ支のよひが上にも豆助が圓ひ言葉に貧州は聞入さか感たかの餘り音がせぬ故に豆助四邊を見廻せば。八方に立並たる貧乏神は何所へやら。消たか散たか失へたか。貧乏の粉もあらばこそ。火入ね火入で多葉粉盆に入り。茶碗ね茶碗で茶棚にいり。硯ね硯。杪子ね杪子。釜ね竈。帳箱は帳箱。帳は帳。諸道具各ろの坐まあつて。則無事な豆助が内。是は如何と神の棚を拜すれば。いつても笑顔のゑびす様。庭の紅葉はやつぱり紅葉。鳶飛て天に至り。魚淵に躍場の。夜明方を見る様て。淋いやら。可笑いやら。嬉いやら。どうやら氣味が惡ひやら。何ともかとも白狐の官上てばかされたかは知らねども。今の御蔭て足事を知の道にも入ぬるか。昔天笠釋

迦の御弟子の其中に女を犯す梦を見て覺て心に不快。佛に參て前夜の夢を具に申て悔ければ。佛答てのたまふは。汝女犯を夢に見るとて。悔む心の強ければ。これ則菩提心也。吉夢なりと仰られしとかや。聞はたりぬる我等も如斯にて。狐狸の所爲にもせよ。少し乍も天命を知ぬる事の有難や。偏に神佛のおん見捨おき御影なりと。神の栅を拜すれは。ゑびすはにて〳〵ほゝゑみ玉ひ。善哉々々でかしたく。汝も今から我等が末社。ゑかし乍じゆつなひ紛に足事を。其方も少しは知ぬれど。暑さ忘るりや影忘ると。とかくなじみの不足へ歸ゞ早いものゞや程に隨分〳〵。己が嬶の貧州に宿貸さぬ樣留ぬ樣。夫かゝ先手細工に拵ぬ樣。偖心得の第一ゝ貧を嬶ふ心をすて。只天命に任べし。是を名付て福者とぞいふ「天命に適ひ足支知る人を福者ともいふ」「貧を嬶を福しやと思ふ嬶ふ心がすぐに貧」。欲か起れば貧州の弟子。我をたてねば我等か門人。汝も是か。我弟子なれば。隨分〳〵我なすわざを學べ〳〵アゝゑかし乍ら。初心の中ゝ已を學ば。精進日にゝ如何せんなどゝ。ゑこせぬ思案が邪魔

をして。退屈するもまゝ。ゐるぢな。先々已れ跡にして。身がちん〳〵の大黒天の真似からせよ。真似ぶ無しして本間になるぞ。盗の真似なら忍盗人。孝子の真似なら先ゐ孝行。大印のまねしやとて頭巾を被り袋をかたげ。槌を持。おやどけねり物みる様にせよとにゐらぞ。先第一に倫約の頭巾を被して上を見ぞ何事にも腹立ぞ。奢ぞ諸らす万事万端に寛仁袋の緒を強く。禍の門と聽ゆる口をしめて。つかりとったけ主には忠。親には孝の子。槌を放さぞ。ぼつても。投てもまれけのでる。氣遣なしの俵に。道ゐ

暫も離るべらずの。食物をはめて。どつさり。ふまへ。いつでも不足のかひ故よ。滿足顔で福々しく。人と下目に見ぬやうよとの脊短なり。是大印の縁記の大略。又我とてもむつうしからず。序の事に安貴して教て聞そ能おさゝやれ。烏帽子かりぎぬ着せしゐ。ぢいらしく雲上めさしに。又不相應な鯛と釣竿と持しゐ。ちやりよて下賤の業ぢり。これ上下和合し禮ゐ和と以て貴しとはる姿ぢり。諸人の好の福と與んといふ餌をお施し。愛敬の釣竿ともち身鯛髪膚え。父母に受たり。ゐへて鱗一枚尾先とて

も。損ひ破らざるぞ。目出鯛と小脇に挾て。常に失ず。世間の導は我と肇の腰抜のといふ叟ね。是惡口にて。實說ならず。我元々無理ぶ願ね少もとんと聞ぬが故は法ん々との惡口おらん。又こし抜と云ふね「心さへ誠の道にかなひおば右や左のお長者にせん」と詠ぜしとき。間違て。いざりじやのこし抜じやのと言か又「まゐてのく人と弱しと思なよ智惠の力の強き故おり」。我人と爭ひ立合ぬ故にこし抜といふかも知らず。いつも完爾こつけども當世はやるぬめたじやおいぞ。誓ね堅き岩のはざま。義のある角に座をゑめて。諸人を愛し救ふ我等と諸人を惡み困窮さは。貧神と本同一躰別神ならぞ。福神遠に伺らず。是汝が腹の中。ひん神遠は非ず是汝ぶ腹の中「世の人の心ぞ打出の小づちかぶ福と出さふと貧と出さふと」。天地のうちね感應而已其昔或剛慾の者ありて。大黒天の打出の小づちと盜り。もち歸て米倉〳〵といひてぶち出ければ稚座頭がたんと出て。大は難義せしとかや麥の種蒔ば麥ぶ出来ず。瓜の蔓はねなすびもならず。惡事すれば惡しか来る不養生おりや病ぶ起る。不足唱へ

打出し
子目くらより
おとりける
欲よ眼の
見へぬおやぢ

りや常住不足。足事と知れば すぐに。極樂。一子出家すれば九族生レ天。一子惡なりや九族はらり。かたゝならずかたよらぬ神の教に佛の誓。福神となつて諸人を救ひ又或時は貧神と現して。惡を懲て善にすゝむ。貧州の誓よりは「貪慾に色と酒とよ朝寐せば祈らすとても神や守らん」。とあり此歌をきゝ。感心のあまりよ我も又「福神は己が家業ぞ精だせば日々に新な日々の商」。と詠しかは是を聞て大黒も一首やられた其歌に「兩手を遊ばさぬのゞ福神。我飡分はあしもとよりあり」。とぞ詠れたり。三神の姿は

三ッに分ども。誓は同し貧福の神。中にも苦勞は貧州先生。寒の中にもぼろ〳〵破し單物にいはでも素足。未其上に人には嫌はれ先此真似が誰がなろ。迷惑な役なれども。團扇と以て働て。我家職をば怠らず貧を與て慾を誡む大慈悲心なり。又我とてもあんまり樂な身でもおし。年が年中岩の上。大黒天もたちぞくめかり。不足をいへば皆相應にあるなれどもそれを忘て面々の。只職分と大事にはるで神と云。汝も家業怠な。是を務て怠らざれば艸木國土悉皆福神是を務す怠る時は艸木國土悉皆貧神。最

前其方も不足を起せし時に。諸道具不殘貧神と化し。我を祈ば我も又。足神と現して。俱ゴ汝を責して。我業ならぬ自然の責。我貧州とぐるゴなりしでゐなし。又我貧神と現じ責んと思ふ心もなく。我ゐ只救んと思へども。神力汝が業ゴ負。我と苦む汝が責なり「世の中ゴ苦ゐなき物に我とわが樂を求てくるしみぞする。貧を嫌へば。却て貧州の一味となる。強て又福を好のも。早貧州の御社中。只天道任かる。則福神。はいうろたへると。よりぞもとへもどつて。諸道具か又貧州ゴ現するろ。其貧州ゴ現するのが

小人の目ゴゐ甚見へゴまくひものじや。長太郎が茶碗一個割つたを見ては。あいつゐ此方の貧乏神じやと。叱る旦那の小倉の帯が。紬びんしうと現し。木綿の頭巾が縮緬州貧。先祖から此通で不自由おく。すんできた家と。榮耀を起せば。つい普請貧州と。現ずれば。家内の心が。自然ゴおおり。御内義にゐもしでの神がのりうつり。息子や手代には色の神や遊神が乘移り。其本亂て末治らねば。旦那は世間へ鼻聲にて。風の神やら。病神やら。八百萬の難義な神達が集つて先祖の家や道具迄を。きよめ玉へ。拂玉ふ

て。他人の物とかるぞうし。又始末がよいとてめは
た。むしうに吝ひれて家内の者までに。困窮させ。引
いきはよく。他人の物まで吸取んと。人の喉ぢめし
てい。我もぎち〳〵ぎちついて。ぎちつきどまひの
者多し。是皆貧乏神のたゝり。又名々の。所持の愚痴
の神の。所爲まて皆身びいきの引例なり。此身ひい
きする身は。我物ゝ他の物か。我ものといはゞ。今五
百年いきて見よ。われなゝらにも。我ものならぬは。
我體。不足をいふい何ものぞ。もふけたかるは。何物
そ。福と願い何ものゝ。貧を嫌は何ものぞ。福と願い

ん〳〵。貧とむさらへ。貧をきらをより。慾をい捨やれ。
慾とてうより。我をはすてやれ。我を捨るか真の福
なり。我と云ふ小體を。持ざれば。大千世界に。さいる
者なく。天上天下唯我獨尊。貧福離て。不生不滅。目出
度〳〵。いつも變らぬ柳い。緑。花は紅。何らおもし為
の。忍びす三郎ゞ慈悲を垂し釣針に。かゝる言葉と
亡失なく。守れや豆助心の鬼を打だせよ。豆助。珍重
珍重万々歳と。神い社にいりごらの盡せぬ宿の。
豆助い感涙顔を潤し。信心膽に徹透し。悅餘て聲を
上ゆら有難やと夕間暮。鐘に夢おぞ覺けり。これか
あゝ誠に目のさめたと云ふものの歟

跋

ひゐらきゝ鰯の頭さす腕には邪惡を拂ひ治る手には作善を拉く煎こら屋豆すけか鬼は外と云ふ咄しのなひませたくり〳〵て見るに慾ゝ諂らふ業のはかまのねぢれたるをすて唯敎にして能きほとゝ節あるおとこむすひ七五三とあめ飾りして完爾〳〵と笑ふ門ゝ来る春の福をまつたけ立る年用意とも云ふなりけれと我も口はかりは拂ひましよの中間なれたいゝお惡魔外道か来るとも此厄拂か舌のさきにしやべりおほせて西の海へさらりこつかこの跋をかい得侍る

人よくに氣を煎こらや足る事を
知らは労ばしいつゝも豆助

明治十八年六月十八日　翻刻御届
明治十八年七月十五日　出版
翻刻兼出版人　東京々橋區加賀町八番地　作田又平
定價金十錢
印刷兼發兌元　同區同町同番地　矯揉社
參校　神谷辰